

論文

『わたしはティチューバ』における黒人奴隷制への抵抗

大野 藍 梨*

はじめに

(1) 「抵抗のテキスト」として読む

マリーズ・コンデ (Maryse Condé) の小説『わたしはティチューバ——セイラムの黒人魔女』(以下『わたしはティチューバ』 *Moi, Tituba sorcière ... Noire de Salem*, 1986) は、黒人奴隷制社会に対する様々な抵抗を描いている。

先行研究では、魔女裁判が注目され、アーサー・ミラーの『つば』(*The Crucible*, 1953) やアン・ペトリの『セイラム村のティチューバ』(*Tituba of Salem Village*, 1964) との比較や、コンデが史料をどの程度参照したかなどについて考察がなされてきた¹。しかしながら、この小説における黒人奴隷制に対する抵抗というテーマについては言及されてこなかった。本稿では、『わたしはティチューバ』の黒人の登場人物たち、とりわけティチューバが、奴隷制によってどのような受難を経験し、受難を契機にどのような変化を遂げ、どのような仕方で抵抗したのかについて考察することを目的とする。

(2) 受動的抵抗と能動的抵抗

まず、奴隷制に対する抵抗がこれまでどのように解釈されてきたかについて確認しておきたい。ガブリエル・アンチオーブは、「奴隷の抵抗を受動的な形態と能動的な形態に」分ける「古典的な」区分を再検討している。受動的抵抗とは、「可視的であれ、不可視的であれ、暴力の行使がなく、とくに特定あるいは不特定の奴隷主の利益、そしてそれと同時に植民地の利益を奪うことに狙いを定めた行為」であるという。この受動的抵抗は、個人の自由意思によって行われる。能動的抵抗とは、「不法行為であり、その結果が植民地の社会的・経済秩序に直接的に打撃を与えるという理由で『積極的』とされる²。しかし、実際の奴隷制への抵抗は、このような単純な二分法では説明できないとして次の三つのカテゴリーに区分した。

(3) アンチオーブの三つのカテゴリー

アンチオーブは、「植民地抑圧、圧政に対する奴隷の抵抗運動を、それぞれ形態、規模、そこに見られる抵抗の実践の内在的性格から三つのカテゴリーに区分」し、それぞれのカテゴリーは「それを行った奴隷の個性における特定の心理的また知性的な様式に対応」しているとして、次のカテゴリー (a)、(b)、(c) を提示している。

カテゴリー (a) には、「小逃亡 (一時的な町や村への逃亡)、無知を装う、嘘をつく、主人の毒殺、怠惰とサボタージュ、自殺、自己損傷、中絶、『家族』をつくることを拒否する、密告、そしてアルコール中毒」が挙げられている。カテゴリー (b) は、カテゴリー (a) の「示威的行為に加えて、奴隷が禁止をかいくぐって、奴隷に許され、黙認されていたものすべてを利用し、具現し、再創造したり、あるいはそれが可能であれば、白人の世界」を「本質的に「つくり変えようとした試み」であり、それらの例として「宗教、言語、奴隷菜園、口承演芸、音楽、歌、冗談、そしてダンス」が挙げられている。カテゴリー (a) と (b) は古典的な二分法によると、いずれも受動的抵抗にあたるとしている。カテゴリー (c) は、「カテゴリー (a) に比べてより直接的で、より劇的な闘いの形態、奴隷制とそれを代表する者たちに対して公然と宣告された戦争」であり、能動的抵抗であるとしている³。

キーワード：黒人奴隷制、抵抗、レイブ、マリーズ・コンデ、フェミニズム

* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2006年度入学 共生領域

(4) 研究方法

前述したアンチオープの抵抗運動の「カテゴリー」のいずれにおいてもその前提にあるのは、「皮膚の色によって彼らを社会的に劣位とした白人」の少数と圧倒的多数の「『有色人』たち」が「共生関係」にあったという事実である⁴。アンチオープの抵抗の概念は、そのような状況からの解放や文化的創造を目指したものであるといえる。アンチオープは、カテゴリー (a) の抵抗を自己否定的であるとし、カテゴリー (c) の抵抗も破滅的であるとする一方、カテゴリー (b) にあたる言語や宗教を「鎖を断ち切る手段としての要領のよさ」であるとして評価している⁵。

本稿は、『わたしはティチューバ』における抵抗を、反乱、逃亡、面従腹背、レイプへの抵抗、主人への反発、墮胎という点から捉え、その抵抗の仕方について詳細をみる。本稿で取り上げる抵抗のうち、反乱はアンチオープのカテゴリー (c) に、その他の逃亡、面従腹背、レイプへの抵抗、主人への反発、墮胎はカテゴリー (a) に区分される。この小説における抵抗の様式の詳細をみる際に、カリブ海地域の奴隷制に対する抵抗の歴史的な実践を分析したアンチオープの研究を適宜参照し、テキスト中のそれぞれの抵抗がもつ性質を理解するための手がかりにする。

主人公ティチューバの年若い恋人イフィジーンは、反乱という最も過激な形で奴隷制に抵抗し、無敵で不死の存在になりたいと願うクリストファーは、逃亡奴隷（マルーン）の指導者として暮らし、奴隷制という支配体系そのものから逃れている。ティチューバの夫であるジョンは、主人のいる前では従順に従うふりをしながら、主人のいないところでは自由にふるまい、主人に対して面従腹背という形で抵抗をしている。第1章では、解放という夢や希望を持ち、反乱、逃亡、面従腹背という形で奴隷制に抵抗した男たちの行動を分析する。

また『わたしはティチューバ』という小説に登場する女性たちは、レイプの脅威にさらされている。ここで「レイプ」というのは、夫婦間におけるセックスの強制も含んでいる。第2章では、レイプが女性に与える肉体的・精神的苦痛を考察するとともに、「女性である」ことはどのような不利益をもたらすのか、そして女性はレイプにどのように抗うのかについて、スーザン・ブラウンミラーのフェミニズム研究を適宜参照しながら考える。同時に白人女性と黒人女性がレイプという共通の経験を契機に連帯感を持つが、白人女性と黒人女性に対するレイプの際に白人男性によって使用される権力関係は異なることについても言及する。

第3章では、この小説の主人公であるティチューバの生涯に焦点をあて、第2章で取り上げたレイプへの抵抗以外に、彼女が奴隷制への抵抗として行った、逃亡、主人への反発、墮胎という行動についても考察する。

第1章 男たちの抵抗

第1節 反乱

反乱という暴力的行為によって植民者と対峙しようとする方法は、最も過激な仕方での抵抗であるといえる。反乱は、植民者と奴隷の「支配 - 被支配」関係を転覆させようとする試みである。

反乱の実現は決して容易ではなかった。過酷な環境と監督の監視のもとに置かれた奴隷たちは、白人権力の前では反乱は危険でばかげたものだと考えていたし、主人に逆らうと手痛い暴力に遭ったり、時には殺されたりするのを知っていたので、否応なく主人に従い、あからさまに反抗することはなかった⁶。しかし、既に充分すぎるくらい耐え、これ以上耐えることは我慢ならないと思った奴隷たちのなかには、暴力による反乱によって植民者と対峙しようとするものが現れた⁷。

反乱が企図されても、それが実現することはほとんどなかった。反乱計画を知った家付き召使が、奴隷の仲間たちを裏切り、反乱計画を主人に密告するからであった。家付き召使奴隷は、畑で働く奴隷たちから分離され、主人の家で寝食をし、主人の求める模範的で従順な奴隷になるよう訓練された。そして家付き召使奴隷は、自分が家付き召使奴隷であることを誇りに思うようになり、畑で働く奴隷たちに対して優越感を抱くのであった⁸。

家付き召使奴隷は、その心性が主人に傾いていたので、主人のスパイとして行動した。家付き召使奴隷は、畑奴隷たちが互いに反目しあうように仕向けたり、卑劣にも反乱の計画を主人に密告したりして、仲間を裏切っていた。そのため、反乱計画のほとんどは、実現される前に主人の耳に入り、それが反故となりそれを企図した奴隷たちは虐殺された後、ひどい虐待を受けて見せしめにされ、一層過酷な環境での労働に連れ戻されるか、奴隷商人や他の奴隷主に売られた。一方密告をした家付き召使奴隷は、主人から報酬をもらい、いっそう「かわいがられ」、他の奴

隷たちよりも待遇が恵まれていたとレスターは指摘している⁹。

イフィジーンは瀕死の状態になるまで鞭打たれ、ティチューバの治療によって回復する。

イフィジーンは母親もかつてティチューバの母と同様に白人によって殺されていた。イフィジーンが反乱を起こそうと決めたのは、母が殺されたことへの復讐のためであり、また自身が瀕死に追いやられるほど鞭打たれたことに対する復讐のためであり、白人の支配する世界への拒否のためである。このまま白人の支配する世界で隷属を余儀なくされるよりも、バルバドス中を放火によって火の海にし、白人を追い出そうとしたのである。イフィジーンは、反乱計画を白人農園主に密告しない約束をとりつけるために、ティチューバをクリストファーの所へ行かせたのである。

イフィジーンが自分の愛するティチューバに、かつてティチューバをないがしろにしたクリストファーのもとへ密告をしないように頼みに行かせたことは、ティチューバにとっても、イフィジーンにとっても苦痛であったに違いない。

結局クリストファーは約束を破り、反乱計画を密告し、ティチューバの家は銃を持った兵士たちに取り囲まれ、ティチューバとイフィジーンは絞首刑にされてしまう。

イフィジーンは反乱計画の失敗は、当時の奴隷制社会における反乱の実現が困難であった史実が反映されている。暴力的な反乱が実現すれば、白人社会に大きな物理的・心理的ダメージを与えることに成功するが、その実現はほとんど不可能だったのである。

第2節 逃亡

過酷な労働と隷属を強いられていた奴隷たちは頻繁に逃亡を企図し、実行した。逃亡することは決して容易ではなかった。特別に訓練された飢えた犬を連れて奴隷が逃亡するのを監視する職業的に奴隷狩りをおこなう者がいた上に、逃亡奴隷を発見して連れ戻した者に報償を与えるような仕組みがあったからである。しかしそれでもなお奴隷は頻繁に逃亡した¹⁰。奴隷が逃亡するという行為自体が困難であっただけでなく、逃亡して暮らすこともまた困難だった。

奴隷が逃亡して暮らすことは、奴隷制解放後の元奴隷たちが置かれていた状況と酷似している。奴隷として暮らしていたときは、「物」ないしは「動物」扱いされながら、生きるために「最低限の」衣食住が与えられていたが、そこから逃亡するということは、その「最低限の」衣食住すら保障されないことを意味する。奴隷制から解放されて自由の身にされたときには、元奴隷たちは歓喜の声をあげるが、それも束の間であり、自由の身になっても生きる術がないことに気づくのである。解放後の奴隷たちは結局元いた主人のところや別の主人の所へ戻り、隷属的な身分に置かれ、「自由」とは名ばかりであった¹¹。

逃亡奴隷の中にも自ら元いた主人のところへ戻った者もいたが、その多くは森に隠れたり、仲間のところで匿ってもらったりしながら暮らしていた。逃亡奴隷の多くは、発見されないように身を潜めて森や仲間のもとに隠れるのであるが、森で一人きりで暮らすか、ひとつの小さなグループを作って相互扶助的に暮らしていた¹²。逃亡奴隷は、逃げた以上自分（たち）で衣食住をまかなうことが余儀なくされる。森の中やプランテーションの目立たないところで掘立小屋を建て、畑をつくったり、鶏を飼ったりして食料を自給し、元いたところの奴隷主から与えられた服や拾ってきた襤褸を着てしのいでいた。

発見されると処刑され拷問を受けることを承知で、そして黒人奴隷からも忌避されることになり、非常に困難な自給生活を余儀なくされるにも関わらず、奴隷たちはそれでも逃亡した。ガブリエル・アンチオーブは、「逃亡は、プランテーションでの過酷さに耐えるよりも、また奴隷制度とその法体系そのものに耐えるよりもまだと奴隷が下した決断であった」と説明している¹³。

逃亡奴隷たちは、しばしば森を抜けだし、食糧や必要な物資を調達するためにプランテーションを襲い、女性を誘拐するなどして奴隷制社会に脅威を与えていた¹⁴。それに対して白人農園主側は、新たな逃亡奴隷を引き渡すことと、反乱の情報を得たら白人農園主に報告することを条件に、互いに干渉しないという「暗黙の了解」を逃亡奴隷と交わしていた¹⁵。

この「暗黙の了解」のために、イフィジーンはティチューバを通じて、クリストファーに反乱計画を白人農園主

に密告しないように頼まなければならないのである。

暴力的手段である反乱によって白人農園主と対峙するやり方は、植民者に重大な物理的・心理的ダメージを与えることに成功するものの、結局は圧倒的な植民者の武力によって鎮圧されてしまう。しかし、逃亡することは、一見消極的な抵抗のように思われるが、奴隷制という支配体系そのものから逃れることのできる唯一の道なのである。

第3節 面従腹背

最も多くの奴隷たちが抵抗した形態は、反乱でも逃亡でもなく、面従腹背であったと考えられる。ここでの面従腹背とは、主人の前では従順に従うふりをしながら、主人のいないところでは自由にふるまうことをいい、一種のサボタージュを指す。面従腹背する奴隷たちの最大の関心は、「できるだけ仕事をしないこと」、「できるだけ鞭で打たれないこと」にあった¹⁶。そのために、奴隷たちは自らを無知に見せかけ、仕事ができないと主人に信じ込ませ、割り当てられる仕事を少なくしようとした。面従腹背する奴隷は、畑で働く奴隷に多く見られた。彼らは家付き召使奴隷とは異なって、主人の家とは別の小屋で暮らし、主人との直接の接触の機会も少なかったので、心性が主人に傾くことがなかったのである。畑奴隷たちは、収穫の量によって自分たちの生活が変わらないことを知っていたので、熱心に農作業に取り組もうとはしなかった。また奴隷の中には、タフィアやラム酒といったアルコールに溺れる者もいた。アルコールに溺れた奴隷たちは、割りあてられ期待された仕事量をこなすことができずに、サボタージュが横行した。アルコールが抵抗の手段になりえたのである¹⁷。

奴隷制は白人農園主たちに、「動産」である奴隷の肉体に対する支配権を与えたが、奴隷の精神は奴隷自身のものであり、支配することができなかった¹⁸。

ティチューバの夫であるジョンは、自分が黒人であり、「支配される者」であるという一種のあきらめのような認識から、スザンナ・エンディコットやパリス一家に従順に従うふりをしている。「従順に従うふり」を見せることは、黒人が生き延びるために必要不可欠であることをジョンは知っているのである。そして主人に対して従順な「仮面の後ろ」で、ジョンの精神は自由なのである。

第2章 レイプの脅威と女たちの抵抗

第1節 白人男性からのレイプ

(1) アベナに対するレイプ

ティチューバの母アベナは、奴隷船に乗せられバルバドスに向かう途中で、甲板の上でイギリス人水夫によってレイプされる。ティチューバは、「侵略的行為」であり「憎悪と侮蔑の行為」の結果としてこの世に産み出される¹⁹。コンデがティチューバを奴隷船でのレイプによって生まれた混血児として設定を行ったのは、「ヒロインに奴隷制の記憶を刻印する作者の意図の表れである」と大辻都は指摘している²⁰。

アベナがレイプの際にどのような物理的抵抗をしたかについては描かれていないが、アベナが逃げることのできない奴隷船の積み荷として乗せられていたという設定を鑑みれば、奴隷船におけるレイプは不可避であり、抵抗も無意味であったといえる。

アベナはレイプによって身ごもった子どもを産み、ティチューバと名づけ、ヤオとともに育てるものの、ティチューバを愛することができない。ティチューバの肌は黒く、髪の毛も縮れ毛で、白人の容姿は残していなかったが、それでもティチューバを見るたびに、奴隷船でのレイプがフラッシュバックとして再現される。アベナは抱きつきじゃれるティチューバを押しつけることで、回避することのできなかった忌まわしい記憶に心理的に抵抗しようとするのである²¹。

宮地尚子はレイプの後も被害者が生き続けるうえでつきまとう「あとくされ」について論じている。レイプは被害者に精神的な負の遺産を与えるが、レイプによって生まれてくる子どもには「豊かな生や文化を生み出す可能性」がある。そしてレイプの被害者は、何らかの形で、レイプの経験という辛さとなんとか折り合いをつけていくしかないのである。

そのようなあとくされにたいする折り合いの中で創造性や、弱者の武器のようなものが生まれると宮地は指摘し

ている²²。ティチューバ自身も、奴隷制や魔女裁判に翻弄されるものの、人びとのために良い魔術を使い、男性と恋をするように、『わたしはティチューバ』の中で、ティチューバは力強い存在として描かれている。

ティチューバが生まれたとき、アベナは子どもが女の子であることをひどく残念がる。「母 [アベナ] には女の運命が、男の運命よりさらに苦痛にみちたものに思えたのだ。女は、置かれた状況から解放されるためには自分を隷属させている男の意思に従い、その男と寝なければならないではないか」とアベナは考えたのである²³。それ以上にアベナがティチューバが女の子であったことを残念がるのは、ティチューバも将来自分と同じようにレイブを経験するかもしれないという危惧からではないだろうか。レイブは「女性の身にふりかかる恐ろしい出来事」だからである²⁴。

ヤオとの愛情のあるセックスと幸せな家庭生活から、見違えるほど美しくなったアベナを見た奴隷主のダーネルは、ティチューバの目の前でアベナをレイプしようとする。二度目のレイブを今度こそ避けようと抵抗したアベナは、刀でダーネルを二回切りつけると、アベナは白人の男を攻撃したという咎で縛り首にされてしまった。奴隷主による奴隷に対するレイブは、「性暴力とみなされないまま」日常的に行われ、奴隷制社会において問題視されていなかったのである²⁵。そして、アベナに対するレイブを契機に、ヤオとアベナとティチューバの一家は離散を迎えるのである。

(2) ティチューバに対するレイブ

パリス家で、「悪魔にとりつかれた」子どもたちが、自分たちを苦しめているのはティチューバであると嘘の告白をすると、ティチューバは、サミュエル・パリスを含む真黒な覆面をかぶった三人の男たちに縛り付けられ、暴力を振るわれながらレイブされた。男の一人は、「ほらほら、ジョン・インディアンの一物だぞ」と嘲りながらティチューバをレイプした²⁶。レイブをしながら魔女の共犯者の名前を言うように告発を要求する男たちに対して、ティチューバは血を流しながらも必死の抵抗をし、魔女の告発をすることも拒否する。レイブの成立は、男の特権であるというだけでなく、「男が女を支配するための基本的な武器となり、男によっては征服欲の、女にとっては恐怖の媒介手段」になるとスーザン・ブラウンミラーは指摘している²⁷。

レイブの途中で、ティチューバの夫のジョン・インディアンが戻ってくると、三人の男たちはレイブをやめ、引き上げる。ジョンはレイプされたティチューバを抱きしめ、涙を流すが、ティチューバのレイブを契機に二人の夫婦生活は破綻しはじめる。ジョンは他の男によるレイブから妻を守ることに失敗して自らの無力さを感じ、ティチューバはレイブを回避できなかったことに失望するのである。ティチューバとジョンは夫婦間での健全なセックスを楽しんでいたが、ジョンは他の男にレイプされたティチューバを「汚された」と感じ、レイブ以降はティチューバとセックスをすることはない。レイブ以前には魔女として誰も告発しないと決めていたが、レイブ後この世に対する復讐を自分自身に誓い、魔女として誰かを告発しようとする。レイブという辛い経験を通して、ティチューバは善良なだけでは自分が「食物」にされることを悟り、自分自身を守るために魔女の告発をしようとしたのである。

『わたしはティチューバ』の中でティチューバが実際に受けたレイブの経験は一度しか描かれていないが、ティチューバが見たレイブをされる夢についても描かれている。その夢では、実際にティチューバが経験したレイブの時と同じように、頭に黒い頭巾を被った男たち三人がティチューバを襲った。黒い頭巾を被っていたが、その男たちが、魔女としてティチューバを告発したサミュエル・パリス、魔女としてティチューバを告発する側にまわり、裕福な白人女性と駆け落ちした夫のジョン・インディアン、ティチューバの魔術で無敵で不死の存在にすることのできなかったことへの不満からティチューバをないがしろにしたクリストファーであるとティチューバは気づいた。金切り声で叫びながら恐ろしい痛みにさいなまされたレイブの夢は、三人の男たちが宿敵であることを暗示し、これから起きる不吉なことの予知夢としてティチューバを不安にさせた。

アベナとティチューバに対するレイブは、白人男性を頂点とする奴隷制のヒエラルヒーに基づいて、性暴力として見なされないままに行われたのである。

第2節 夫婦間におけるレイブ——強制的なセックス

アベナとティチューバは女性奴隷であるために夫でない白人男性からレイブを受けるが、この小説ではレイブと

呼べるような、夫側からの強制的なセックスがなされている夫婦が三組あり、その夫婦たちは全員白人である。この小説において、夫でない男性からレイプされたアベナとティチューバは、夫からレイプを受けている白人女性たちと——アベナはジェニファーと、ティチューバはエリザベスとヘスターと——仲良くなり、レイプを受けた者どうしとして連帯感を持っている。ダーネル・デイヴィスとジェニファーの夫婦は、二人の性生活については描かれていないが、デイヴィスは大勢の妾とその子どもを持っていたことが記されている。妻のジェニファーは、無理やり結婚させられたダーネルを「野獣のような男」だとして憎んでいた。ダーネルは経済的にも性的にも貪欲で、奴隷を買いたたこうとしたり、アベナをレイプしようとしたことからもその貪欲さが表れている。このようなダーネルが妻のジェニファーを相手に愛情のこもったセックスをしないことは容易に想像がつく。

サミュエル・パリソとエリザベスの夫婦の場合、エリザベスはセックスを嫌悪しており、ティチューバとの会話においてもセックスのことを話題にすることを嫌がる。サミュエルは、エリザベスとのセックスの際に「早く済ませたいとあせて」自分の着ているものは脱がず、エリザベスの着ているものも脱がさない。エリザベスは、セックスのことを、「いやなこと」、「わたしたちの中に受け継がれているサタンのなごり」であると言い、セックスへの嫌悪を示している²⁸。

ティチューバが獄中で知り合ったヘスターとその牧師である夫の場合、牧師はヘスターを嫌っているにもかかわらず四人の子どもを孕ませた。ヘスターも夫を嫌っており、嫌いな夫の子どもを産みたくないとして、妊娠中に多くの薬を飲んで四人の子ども全てを墮胎した。夫がジュネーブに出張している間に他の男の子どもをみごもり、獄中で暮らしていたヘスターは、やはりその子どもを墮胎しようと決める。ヘスターは子どもを持つことに対して脅えを感じているのである。

ブラウンミラーは夫婦間の性行為について、「力づくで妻に性交を強要する夫が強姦罪の適用を免れていることは、[……] 時代遅れも甚だしい」、「強制的な性行為は結婚における夫の権利ではない。そんな『権利』など、人間の平等と尊厳を欺くものでしかない。性行為は [……] 妻に強要される『義務』ではなく、その都度夫と妻の間で承諾を交わした上で行われるべきものだ」という解釈を述べている²⁹。このような解釈は、男女平等や自由・権利の保障という概念が浸透した現在において初めて生まれたものであるが、ブラウンミラーの解釈によると、夫婦間での強制的なセックスは、「レイプ」と呼ぶことができる。

『わたしはティチューバ』の舞台である17世紀には、当然ながらブラウンミラーのような解釈は存在せず、白人夫婦間においても強制的なセックスが日常的に行われ、白人女性もまた隷属を強いられていたのである。コンデは、熱帯の気候に耐えられない病気がちで、純粋でか弱い、夫に従属した白人女性像としてジェニファーとエリザベスを描く一方で、黒人女性であるティチューバを、強さや生命力の象徴として描いたと語っている³⁰。アベナは夫のヤオと、ティチューバはジョンをはじめとする男性パートナーと奔放にセックスを楽しむシーンが描かれていることによりこの小説における白人女性が、隷属的な性役割を強要されていることが一層、強調される。『わたしはティチューバ』において黒人女性が奴隷制を通じて白人男性に支配されているのに対して、白人女性もまた夫婦間の力関係によって男性に従属することを強いられているのである。

第3章 ティチューバの抵抗

第1節 逃亡

(1) 少女時代の逃亡奴隷生活

アンチオープによると、「逃亡奴隷とは一般に、奴隷が主人のプランテーションから脱走して、森、山、街の中へ身を隠すことを言い」、さらに正確には、「短期間あるいは長期間、アウト・ローになることであり、当局への挑戦」であるという。また「その意味では、農園主ならびに植民地当局の権威を傷つけ、入植者とその財産を危険にさらす意図をもって、彼らの指令に服することを拒絶した奴隷はすべて逃亡奴隷とみなしてよい」と述べている³¹。

ティチューバの場合、アベナの処刑とヤオの自殺によって、ダーネルにプランテーションから追い出され、その後ママ・ヤーヤとの死別によって、人目に付かないところで自活を余儀なくされたのであって、正確には自ら「逃亡」したわけではない。しかし、ママ・ヤーヤとの死別からジョンと暮らすまでの間、ティチューバは「アウト・ロー」

として十四歳から逃亡奴隷と同様の生活をはじめ。ティチューバは人目につかない場所を選んで掘立小屋を建て、庭をつくり、どうにか自活する。ティチューバの逃亡奴隷としての暮らしは、畑で働く奴隷よりも少しはましで、自由があったため、ティチューバにとって居心地のよい生活であったと考えられる³²。

逃亡奴隷として暮らすことは、黒人奴隷は白人による保護・管理の下でしか暮らすことのできないというパターンリズムを覆すものであるといえる。その意味で、少女時代のティチューバが逃亡奴隷として生活することは、白人の保護・管理なしでも暮らすことが可能であるという、白人に対する一種の抵抗として示されている。アンチオーブは、「逃亡とは、なによりもまず隷属を拒否し、自由に向う奴隷の不屈の精神状態を言うのである」と記している³³。少女時代のティチューバは、まさにアンチオーブが意味するところの「逃亡」をし、白人社会への隷属を回避していたのである。

(2) 帰郷後の逃亡奴隷生活

バルバドスに帰郷したティチューバは、友人に連れられて逃亡奴隷のキャンプ地へしぶしぶ向かう。ティチューバはアメリカから帰郷する前に「奴隷解放証書」をベンジャミンから渡され自由民になっていたの、白人社会から隠れる必然性はなかったし、逃亡奴隷と関わりを持つことで自分の身を危険にさらしたくないと考えていたからであった。

逃亡奴隷たちは、奴隷からも軽蔑される存在であった。ティチューバが逃亡奴隷のキャンプ地で暮らしていることに対して、アベナは「マルーンと暮らして、おまえは何をしているのかい？ あいつらは盗んだり殺したりばかりする悪い連中なんだよ！」、「あいつらは母親や兄弟たちを奴隷のままに残して、自分たちだけ自由の身で暮らすただの恩知らずの一団なんだよ」と、逃亡奴隷たちを非難し、ティチューバが逃亡奴隷のキャンプ地に留まっていることに反対する³⁴。

十五人ほどから成る逃亡奴隷のキャンプ地のリーダーであるクリストファーは、無敵で不死だと伝えられている英雄のティ・ノエルにあこがれ、白人と戦う機会を窺っていた。ティチューバは、クリストファーを自分の魔術によって無敵で不死の存在にできないことが分かったと、自分も男たちとともに、初めて暴力的な手段で白人と対峙しようとするが、「女だから」という理由でクリストファーに一笑に付されてされてしまう。クリストファーは、白人に対する反乱を目論んでいたが、——前述のような、マルーンと農園主による「暗黙の同意」がこの小説においても交わされていたので——実際に白人と闘おうとしていたのかについては定かではない³⁵。

ティチューバとクリストファーの肉体のみの関係は不毛であったが、ティチューバは逃亡奴隷の女たちへの健康に気を配り、女たちとの連帯を深めることで逃亡奴隷のキャンプ地における自分の存在意義を見出していた。つまり、キャンプ地でのティチューバは、治療という形で逃亡奴隷たちの生活に加担し、間接的な形で白人社会に対する抵抗の一端を担っていたのである。

第2節 主人への反発

(1) スザンナ・エンディコットに対する反発

ティチューバはその生涯のなかで、スザンナ・エンディコット、サミュエル・パリス、ベンジャミン・コーヘン・ダゼヴェドに奴隷として仕えているが、スザンナ・エンディコットとサミュエル・パリスに対して反発していた。

スザンナ・エンディコットは、ティチューバを嫌悪し、常に命令口調で話し、時にはティチューバの存在自体を無視した。「わたし [ティチューバ] はこの女 [スザンナ・エンディコット] の望んでいるような人間に縮小された。つまり、嫌悪の念を起こさせる皮膚の色をした、のろまにすぎない」のだと思い知らされたのであった³⁶。

スザンナ・エンディコットは、夫のジョンに命じてキリスト教の祈りの言葉をティチューバに教えさせ、スザンナ・エンディコット自らが聖書の教師役となってティチューバを改宗させようとした。ティチューバは、キリスト教の祈りの言葉を口にするに激しく抵抗する。ティチューバにとって、自分の人生に何の関係もないと思われるキリスト教の祈りを口にするには、非常に精神的な苦痛だったのである。

スザンナ・エンディコットがティチューバの生き立ちをジョンに暴露することで、ティチューバとの関係を仲たがいさせ、ティチューバから「ジョン・インディアンを奪い取りたがっている」ことに怒りを覚えたティチューバは、

反撃を始める³⁷。自分の魔術によって「厄介で面倒な屈辱的な病気」にさせるのである³⁸。ティチューバの魔術は功を奏し、スザンナ・エンディコットは、下半身が汚物にまみれるという屈辱的な病気にかかるが、瀕死の状態においても、ティチューバに必ず復讐すると言う。

『わたしはティチューバ』の中で、スザンナ・エンディコットは、底意地の悪い女性として登場し、その言動が悪質なほどティチューバの置かれている状況が過酷であると思わせる描写がなされている。ティチューバが魔術を使うまでしてスザンナ・エンディコットに反発したのは、スザンナ・エンディコットの底意地の悪さから生じる言動や、クリスチャンにされることへの抵抗のためであり、夫のジョン・インディアンを独り占めしたいという嫉妬のためである。スザンナ・エンディコットの「厄介で面倒な屈辱的な病気」にかからせたことで、不幸にもティチューバはバルバドスから引き離され、サミュエル・パリスの一家とともに渡米することを余儀なくされるのである。

(2) サミュエル・パリスに対する反発

ティチューバとジョンは、スザンナ・エンディコットから、新しい主人である牧師のサミュエル・パリスに譲渡される。牧師であるサミュエルは、高圧的で、またしてもティチューバとジョンにキリスト教徒として振舞うことを強制する。これほどまでにキリスト教の宗教訓練がなされる背景には、「奴隷に対する宗教の奨励は奴隷主の義務であるだけでなく、それが働き手の士気を高め、彼らが提供するサービスの質を高める点でもまた奴隷主の利益になる」という考えが浸透していたからである。そして、黒人奴隷は生物学的にも文化的にも劣っているが、キリスト教への信仰によって、奴隷の魂を救済し、文明化する必要があるとされていたのである³⁹。

キリスト教徒の日課として、その日犯した自分の罪を告白することがティチューバとジョンにも強制されるが、ティチューバはこれに我慢ができないのである。そして「なぜ告白しなきゃいけないんですか？わたしの頭の中や心に起こっていることは、あなたには関係ありません」と言い放ち、サミュエルから叩かれる⁴⁰。このティチューバの言葉からも分かるように、奴隷たちは奴隷主によって課せられる肉体的労働に従事していたが、精神的な隷属を拒否し、奴隷の精神は奴隷自身のものであったのである。

第3節 墮胎

ボストンでパリス一家とともに暮らしていたティチューバにとって、唯一の楽しみは夫のジョンとのセックスであり、それは毎晩行われた。ティチューバは自分が妊娠していることに気づくが、それを夫のジョンにさえも打ち明けることなく、墮胎することを決める。子どもを産んで奴隷制社会で隷属を強いられる運命を与えるよりは、子どもを産まない方がましだと考えたからである。アンチオープの言葉を借りると、「自己の民族のひこばえを、屈辱や人間的墮落、人間として十二分生きられない人生に委ねるよりはと、決然と摘むことを選んだ」のである⁴¹。ティチューバは、子どもを墮胎することを決めたとき、かつてバルバドスで見た墮胎について回想している。

「奴隷には、母であることの幸せなどない。母になることは、運命を変える機会をもたない無邪気な赤ん坊を奴隷制と屈辱の世の中へ吐き出すこととたいして変わらなかった。子供時代を通じて、わたしは奴隷たちが赤ん坊の、まだねばねばしている感じの卵型の頭に長いトゲを刺しこんだり、毒を塗った刃物で臍の緒を切ったり、さもなければ夜、怒れる霊の出没する場所に捨てたりして赤ん坊を殺すのを見てきた。子供時代を通じて、わたしは奴隷たちが子宮を永久に不妊にし、裏に深紅の経帷子を張りめぐらした墓に変えるための薬や風呂、注入液の処方教えあっているのを聞いてきた⁴²。」

ティチューバがどのような方法で墮胎したかについては書かれていないが、大辻によると、墮胎する母親や墮胎を手伝う産婆は、当時嬰兒を喰う魔女のイメージと結び付けられていたという⁴³。墮胎は、妊娠可能な女性の生物学的特徴ゆえに成し得るものであり、奴隷制社会において、奴隷の女性たちは自らの身体を利用した奴隷制への抵抗として墮胎を行っていた⁴⁴。ティチューバが、妊娠の事実をジョンに打ち明けず、墮胎することを一人で決めたのは、子どもをみごもり、それを自分の胎内から吐き出すという行為につきまとう肉体的な痛みや精神的な苦しみは、男には理解することができない、もしくは痛みや苦しみを自分一人で引き受けようとしたからだと考えられる。最善を考えての結果、ティチューバは子どもを墮胎することを決めたものの、墮胎後、自分の子どもを殺したという

罪の意識にさいなまれ、その後のティチューバの人生においても何度も墮胎の記憶が甦る。

『わたしはティチューバ』には描かれていないが、キリスト教会はまた墮胎する奴隷の女性たちを糾弾する。墮胎する母親は、「自身の胎の子という実りを破壊し、自らの肉の肉、自らの血の血の命を失うおぞましき創造物」と見なされ、「絞首刑に値する」とされた⁴⁵。

キリスト教会による墮胎の禁止にも関わらず、女性の生物学的特徴と結び付いた墮胎は、女性自らの身体を利用した奴隷制への抵抗として頻繁に行われていたのである⁴⁶。

おわりに

黒人を社会的に排除する奴隷制への抵抗を、反乱、逃亡、面従腹背、レイプへの抵抗、反発、墮胎という点から考察してきた。これまでの議論を踏まえ、『わたしはティチューバ』における抵抗を、「男の抵抗」と「女に特有の抵抗」に分けた上で、いかに女が男の反乱や逃亡という抵抗から疎外されていたのか、さらにレイプへの抵抗や墮胎という女の生物学的特徴に結び付いた抵抗を余儀なくされていることについて整理する。

「男の抵抗」とは、第1章で論じた、イフィジーンの暴力行為による反乱や、クリストファーの逃亡奴隷のリーダーとしての生き方、ジョンの面従腹背する生き方を指す。これらの抵抗を、「男の抵抗」として分類したが、これらは女であっても抵抗が可能である。しかし、暴力行為による反乱をするには、女は男に力ではかなわない。また逃亡奴隷として暮らすにしても、女は自分を強姦から身を守るために、男のリーダーに性的に隷属することを余儀なくされる。ブラウンミラーは、「ある男に守ってもらうということで他の男たちからの暴行を回避するという構図は、女たちに多大な代償を強いた。自分が生まれながらに防衛能力を欠いているという認識は女たちを失望と幻滅に陥れ」と指摘し、「女は全面的に所有された従属物であり、自立した存在ではなかった」と述べている⁴⁷。

一方「女に特有の抵抗」とは、レイプに対する抵抗と、墮胎を指す。他人であっても、夫婦間であっても、「身体構造上、オスにはレイプすることのできる能力があり、メスはレイプを受けやすい弱さ」があり、女は自分の体をレイプから守り、抵抗する必要がある⁴⁸。女はレイプを受けやすいという身体上の弱点を持っている上に、妊娠する可能性があり、自分をレイプした男の子どもを身ごもるという最悪の事態を避けるためである。ブラウンミラーが指摘しているように、他の男からの強姦を避けるために一夫一婦制が生まれたにも関わらず、夫婦間においてもレイプが存在したことが『わたしはティチューバ』では描かれている⁴⁹。そして、『わたしはティチューバ』の登場人物の女性たちは、人種を越え、レイプの被害という共通の経験によって友情を深め、連帯感をもつのである。

望まない妊娠をした女たちは、墮胎することを選んだ。ティチューバや黒人奴隷の女が墮胎するのは、奴隷制社会に子どもを送り出したくないという奴隷制に対する抵抗であり、ヘスターのような白人女性が墮胎するのは、自分を孕ませた男に対する抵抗であるといえる。『わたしはティチューバ』の舞台として設定されている17世紀の同時代におけるフランスでは、実際に未婚の女や貧しい女たちによって嬰兒殺しは頻繁に行われていたのである⁵⁰。ティチューバとヘスターは、レイプと墮胎という共通の経験から女どうしの絆で結ばれる。

この小説において、男たちが反乱や逃亡、ないしは面従腹背という行動によって奴隷制の破綻、奴隷制からの解放を夢見るのに対して、女はそれらの抵抗のいずれに加わろうとしても疎外される。それとは別に、女の奴隷は、レイプへの抵抗や墮胎という女の性に結び付いた抵抗を引き受けなければならず、抵抗の際には「二重の隷属性」が強いられる。

『わたしはティチューバ』は、史実に基づいた歴史小説ではなく、多分にコンデの認識が反映されているが、女奴隷が男奴隷よりもさらに過酷な状況に置かれていたことを見事に描いている。コンデ自身が語っているように⁵¹、彼女が17世紀の奴隷制を舞台とするこの小説を現在の問題として20世紀に書いたのは、ティチューバを犠牲にした男尊女卑、不寛容、偏見や人種主義という奴隷制を支えた価値観が今日においても存在しているからである。

注

- 1 風呂本惇子「セイラムの黒い魔女—三つの「ティチューバ」像—」『神戸女学院大学論集』第43巻第1号（1996年7月）19-30頁。
Robert H. McCormick, "From Africa to Barbados via Salem," *CARIVANA* (5), 1996, pp. 151-157.
- 2 ガブリエル・アンチオーブ, 石塚道子訳『ニグロ、ダンス、抵抗——17～19世紀カリブ海地域奴隷史』人文書院, 2001年, 198頁.
- 3 アンチオーブ, 前掲書 198-199頁.
- 4 アンチオーブ, 前掲書 197頁. 傍点は筆者による。
- 5 アンチオーブ, 前掲書 197頁.
- 6 トーマス・L・ウェッバー, 西川進監訳『奴隷文化の誕生（もうひとつのアメリカ社会史）』新評論, 1988年, 187頁.
- 7 ウェッバー, 前掲書 184-185頁.
- 8 ジュリアス・レスター, 木島始・黄寅秀訳『奴隷とは』岩波新書, 1978年, 104-105頁.
- 9 レスター, 前掲書 104-106, 145頁.
- 10 アンチオーブ, 前掲書 200-201頁.
- 11 レスター, 前掲書 185-187頁.
- 12 下山晃「奴隷の日常と奴隷主支配体制」（池本幸三・布留川正博・下山晃『近代世界と奴隷制』人文書院, 2003年所収）251-254頁.
- 13 アンチオーブ, 前掲書 202頁.
- 14 下山, 前掲書 254頁.
- 15 加茂雄三『地中海からカリブ海へ』平凡社, 1996年, 39-40頁.
- 16 レスター, 前掲書 117頁.
- 17 アンチオーブ, 前掲書 217-218頁.
- 18 レスター, 前掲書 123頁.
- 19 Maryse Condé, *Moi, Tituba sorcière...Noire de Salem*, Mercure de France, 1986, p. 13（邦訳書：風呂本惇子・西井のぶ子訳『わたしはティチューバ——セイラムの黒人魔女』新水社, 1998年）6頁. 以下本稿の引用は邦訳にしたがっているが、原文と邦訳を厳密に照合するチェックを行っている。
- 20 大辻都「奴隷制、魔女裁判とカリブの女性—マリーズ・コンデ『わたしは魔女ティチューバ』を補助線として—」（宮地尚子編『性的支配と歴史——植民地主義から民族浄化まで』大月書店, 2008年所収）223頁.
- 21 Condé, *op. cit.*, p. 18（邦訳書, 11頁）.
- 22 宮地尚子「性暴力と性的支配」（宮地尚子編『性的支配と歴史——植民地主義から民族浄化まで』大月書店, 2008年所収）46頁.
- 23 Condé, *op. cit.*, p. 17（邦訳書, 10頁）.
- 24 スーザン・ブラウンミラー, 幾島幸子訳『レイプ・踏みにじられた意思』勁草書房, 2000年, 237頁.
- 25 宮地, 前掲書, 22頁.
- 26 Condé, *op. cit.*, p. 144（邦訳書, 160頁）.
- 27 ブラウンミラー, 前掲書 6頁.
- 28 Condé, *op. cit.*, p. 70（邦訳書, 75-76頁）.
- 29 ブラウンミラー, 前掲書 304, 306頁.
- 30 Françoise Paff, *Conversations with Maryse Condé*, University of Nebraska Press, 1996, pp. 63-64.
- 31 アンチオーブ, 前掲書 208頁.
- 32 アンチオーブ, 前掲書 206頁.
- 33 アンチオーブ, 前掲書 209頁.
- 34 Condé, *op. cit.*, p. 234（邦訳書, 264頁）.
- 35 加茂, 前掲書 39-41頁. カリブ海地域の中でもとりわけジャマイカでは、新たな逃亡奴隷を植民地当局に引き渡すことや反乱・戦争時にジャマイカ政府を援助することを条件に、逃亡奴隷の自由が保障されていた。
- 36 *Ibid.*, p. 47（邦訳書, 46頁）.
- 37 *Ibid.*, p. 51（邦訳書, 51-52頁）.
- 38 *Ibid.*, p. 53（邦訳書, 54頁）.
- 39 ウェッバー, 前掲書 90頁.
- 40 Condé, *op. cit.*, p. 69（邦訳書, 74頁）.
- 41 アンチオーブ, 前掲書 221頁.
- 42 Condé, *op. cit.*, p. 83（邦訳書, 90頁）.

- 43 大辻, 前掲書 226 頁.
- 44 アンチオーブ, 前掲書 220-221 頁.
- 45 アンチオーブ, 前掲書 221 頁.
- 46 アンチオーブ, 前掲書 220-221 頁. 大辻, 前掲書 225-226 頁.
- 47 ブラウンミラー, 前掲書 8, 10 頁.
- 48 ブラウンミラー, 前掲書 5 頁.
- 49 ブラウンミラー, 前掲書 8 頁.
- 50 大辻, 前掲書 226 頁.
- 51 Pfaff, op. cit., p. 64.

参考文献

(日本語文献)

- アンチオーブ, ガブリエル, 石塚道子訳『ニグロ、ダンス、抵抗——17～19世紀カリブ海地域奴隷史』人文書院, 2001年.
- ウェッバー, トーマス・L., 西川進監訳『奴隷文化の誕生(もうひとつのアメリカ社会史)』新評論, 1988年.
- 大辻都「奴隷制、魔女裁判とカリブの女性—マリーズ・コンデ『わたしは魔女ティチューバ』を補助線として—」(宮地尚子編『性的支配と歴史——植民地主義から民族浄化まで』大月書店, 2008年所収) 213-236頁.
- 加茂雄三『地中海からカリブ海へ』平凡社, 1996年.
- 下山晃「奴隷の日常と奴隷主支配体制」(池本幸三・布留川正博・下山晃『近代世界と奴隷制』人文書院, 2003年所収) 224-268頁.
- ブラウンミラー, スーザン, 幾島幸子訳『レイブ・踏みにじられた意思』勁草書房, 2000年.
- 風呂本惇子「セイラムの黒い魔女—三つの「ティチューバ」像—」『神戸女学院大学論集』第43巻第1号(1996年7月) 19-30頁.
- 宮地尚子「性暴力と性的支配」(宮地尚子編『性的支配と歴史——植民地主義から民族浄化まで』大月書店, 2008年所収) 17-63頁.
- レスター, ジュリアス, 木島始・黄寅秀訳『奴隷とは』岩波新書, 1978年.

(英語文献)

- McCormick, Robert H., "From Africa to Barbados via Salem," *CARIVANA* (5), 1996, pp. 151-157.
- Pfaff, Françoise, *Conversations with Maryse Condé*, University of Nebraska Press, 1996, pp. 56-66.

(フランス語文献)

- Condé, Maryse, *Moi, Tituba sorcière...Noire de Salem*, Mercure de France, 1986 (邦訳書: 風呂本惇子・西井のぶ子訳『わたしはティチューバ——セイラムの黒人魔女』新水社, 1998年).

Resistance to Black Slavery in Maryse Condé's *Moi, Tituba sorcière*...

OHNO Airi

Abstract:

Previous research on Maryse Condé's *Moi, Tituba sorcière*... has not focused on the theme of resistance to black slavery. This paper attempts to illuminate the novel's depiction of the black characters' hardships in slavery and their resistance to slavery itself. Using Gabriel Entiope's categories, revolt, escape, superficial obedience, resistance to rape, hostility to whites and abortion are regarded as forms of resistance to slavery. Furthermore, this resistance is divided into "male resistance" and "resistance particular to females," and the details of each gender's form of resistance are analyzed. In the novel, black male resistance aims at liberation from slavery by revolt, escape or superficial obedience. But the females are alienated from this black male resistance, because the females are not as physically strong as the males, and the female slaves are subjugated by the male slaves. Moreover, the black females are obliged to experience hardships exclusive to their sex, such as resisting rape by whites or undergoing an abortion. In *Moi, Tituba sorcière*..., the female slaves exist in a more severe situation than the males. According to Condé, she wrote the novel because the male chauvinism, intolerance, prejudice and racism that oppress Tituba still prevailed in the 20th century.

Keywords: black slavery, resistance, rape, Maryse Condé, feminism

『わたしはティチューバ』における黒人奴隷制への抵抗

大野 藍 梨

要旨:

コンデの『わたしはティチューバ』に関する先行研究は、黒人奴隷制への抵抗を主題としてこなかった。本稿では、黒人の登場人物の奴隷制からの受難や抵抗について考察する。

アンチオープのカテゴリーを援用して、この小説の抵抗を、反乱、逃亡、面従腹背、レイプへの抵抗、主人への反発、墮胎という点から捉え、それらを「男の抵抗」と「女に特有な抵抗」に分けてその詳細を分析している。

この小説において、男が反乱や逃亡、面従腹背により奴隷制からの解放を目指すのに対し、女は男の抵抗から疎外される。また、女の奴隷は、レイプへの抵抗や墮胎という性に結び付く抵抗を強いられる。

『わたしはティチューバ』は、女奴隷が男奴隷よりも一層過酷な状況に置かれていたというコンデの認識が反映されており、コンデがこの作品を20世紀に書いたのは、ティチューバを犠牲にした男尊女卑、不寛容、偏見、人種主義が現代においても見られるからである。